

猛烈台風再来

昭和六十一年は日本列島に上陸する台風がなかった。それが二十数年も続いた台風襲来の静穏な年月の終焉だったかもしれない。翌、昭和六十二年には台風十二号がひさびさに大型で強い勢力を保ちながら九州の西海上を北上し日本海に抜け、九州から北海道までを猛烈な暴風雨に巻き込んだ。五島列島の福江で最大瞬間風速五十五・六メートルを記録、福岡でも四十九・三メートルと今回の台風十九号並みの強風が九州を中心に吹き荒れた。

これを序章にして昨年の台風十九号は、昭和三十六年の第2室戸台風以来の非常に強い台風のまま日本列島に接近上陸した。そして今年の台風十九号は昭和二十九年の洞爺丸台風の再来のごとく、韋駄天走りで列島を駆け抜け風台風として各地を蹂躪した。

昭和三十三年の狩野川台風、翌三十四年の伊勢湾台風をはさんで洞爺丸台風、第2室戸台風という大きな被害をもたらした命名台風が相次いだこの七年間は、ここ百年で最悪の台風の襲来期間であった。そしてその後

続いた穏やかな二十数年が過ぎて、三十数年周期で再び危険な期間に入ってきている。

一昨年の秋、沖縄で開かれた気象学会での台風シンポジウムの中で、大型台風が強い勢力を保ちながら日本列島に襲来する頻度が高い期間に三十数年の周期があり、ここ二十数年の静穏な時期は終わり、この数年、危険性が増大してきている」と筆者が猛烈台風の再襲来の危険性を指摘していた。

去年そして今年的大型台風の襲来は、不幸にしてまさにこの予告シナリオどおりに進んでしまっている。台風という気候な相手次第で翻弄されるが、猛烈台風再来の危険性は高いとの心構えだけは忘れずにして欲しいものである。

気象庁 村松 照男